內部知覺について

西田幾多郎

六

主體なき作用としての本體と、主語となつて述語となることなき本體とは、如何なる關係に於て立つであらうか。純なる形相ともいふべき具體的一般者の背後に、更に此等の形相を自己の屬性となす質料が認められた時、それが主語となつて述語となることなき個物となる。此場合我々は何處までも特殊なるものが主語となると考へる。併し質料が潛在的形相として現實的形相と共に一つの作用となる時、純なる形相の場合に於ての樣に、判斷の主語となる特殊なる主體は消失して再び一般的なるものが主語となると考へることができる。ロッチェの云ふ如くすべて實在は相互作用であるといふことができる。我々が一つの三角形について證明することは、幾何學的空間を主語として述語すると考へ得る如く、或一つの物理現象について

論ずる時、物理的世界を主語として述語するのである。作用と作用との世界に於ては、特殊なる主語といふ樣なものはなくなる。主體なき作用といふのは、主語となつて述語とならないといふ本體の意味を失ふのではない、一般的なるものが主語となるのである。純なる形相の背後に質料を見た時、本體としての個物の考が成立ち、かゝる質料が潛在的形相として、すべてが形相化せられた時、本體としての純なる作用の考が成立つ。併し純なる作用とは尙知るものではない。働くものから知るものに進み行くには純なる作用の背後に又何かが認められねばならぬ、働くものの背後に働かないものが認められねばならぬ。我々は普通に物が働くといふ。併し性質の所有者としての物は、ロッチェの論じた如く、作用の立場に於ては、一たび消え失せなければならない。働くものゝ主體は、働くと共に働かざるものでなければならぬ。而してかゝるものを、我々は我々の自己に於て見るのである。我とは主體なき作用の主體である。赤や青の性質が光線の作用と解せられ、かゝる作用の本體性をその儘にして、更に一つの主體に結合する時、それは精神作用となる。すべての合目的的實在も此の如き意味に於ての本體でなければならぬ。

私は前に空間の如きものに於ては、一般的なるものが主語となると云つた。マイ

ノングの云ふ如く色の判斷にも先驗性があるとすれば、色の經驗自身についても同樣のことを云ひ得るでもあらう。一般的として述語となるものが、主語として特殊なるものゝ全體を含むことゝなるのである。かういふ場合に於て、主觀と客觀とは如何なる關係に於て立つか。私は一般的なるものが全體として本體性を有する時、それ相當の意味に於て、その中に主觀が含まれて居なければならぬと思ふ。我が物の中に含まれることによつて、物が我に對して客觀性を有するのである。マイノングの云ふ如き先驗的なる色の判斷に於ては、色の體系が主體となる如く、視覺作用に於ては、色一般の體系がそれ自身を發展する作用となる、卽ち働くものとなる。色の性質が色の潛在として作用化せられる時、色の Entelechie といふものが本體となるのである。時とは質料を形相化する範疇である。主語となつて述語とならないと考へられる物が、時の範疇によつて合理化せられるのである。併し前に形相が質料によつて特殊化せられることによつて、個物としての本體を見ると云つた如く、質料が形相化せられて一般的なるものが主體となつた時、更に我々は何處までも主語となつて述語となることなき主體といふ如きものを考へざるを得ない。作用の範疇の中に入り來らずして、而も作用の範疇は之によつて成立する主體がなければならぬ。

第一の範疇たる本體によつて他が實在的となる如く、働きなき主體によつて作用の實在性が得られるのである。かゝる主體なき作用の本體とは如何なるものであらうか。

我々が純なる作用と見るものが、主語となつて述語となることなき本體の意義を有するには、何處にか主體がなければならぬ。普通に物が働くといふ樣に、働く物が働きの外にあるならば、その物は潛在として働きの內に溶かさるべきものでなければならぬ。純なる作用が一つの本體として考へられるには、働くことなき本體が働き其者の中になければならぬ。而して働き其者の中に主體を求める時、判斷が判斷自身を主體とすると考へねばならぬであらう。判斷に對し偶然たると共に特殊化の原理たるものが、主體として外から與へらるれば、個物としての本體となるが、之が內から與へられる時、作用としての本體となるのである。作用其者が本體となるには、判斷其者の中に特殊化の原理たるものが含まれて居なければならぬ、最後の種差が含まれて居なければならぬ。然らざれば、純なる作用は單なる具體的一般者と擇ふ所はない。此の如き統一が云ふまでもなく知る者である。知る我とは純なる作用の統一として、之を特殊化するものである。

或は知る主觀といふ如きものは、判斷の主體たる意義を失ふと考へられるであらう。併し主語となつて述語となることなき主體とは、判斷の客語と主語との結合でなければならぬ。此物は赤いといふ時、物と赤とは同じいのではない、物は性質的一般者の統一となるのである。右の如き意味に於て知る者は作用的一般者の統一となるのである。知ると働くとは區別すべきであるが、知る者とは働くものゝ統一點でなければならぬ。我々は自己の反省によつて、外に働くものを見るのである。純なる作用が作用自身の統一を保つには、働きの中に入り來らざる主體といふものがなければならぬ、見る眼といふ樣なものがなければならない。

判斷に於ては、何時でも特殊なるものが主語となり、一般的なるものが述語となる。その特殊なるものが何處までも特殊なるものとして、一般化することができないと考へられる時、それが個物として主語となつて述語となることなき本體と考へられる。併しかく考へる場合、眞に判斷の主語となるものは、何時でも特殊化の原理であると考へることができる。この特殊化の原理がその述語となるものに等しき時、先驗的認識の世界を見るのであるが、此の特殊化の原理が判斷を超越し判斷としての自己の表現を拒んだ時、個物として主語となつて述語となることなき本體となる。

此立場が直覺の立場であつて、判斷としては、唯自己同一の判斷として自己を表現し得るのみである。自己同一の判斷は特殊化の原理が自己自身を表現する判斷形式である。而して特殊化の原理が單に超越的主語たるのみならず、それ自身が判斷するものである場合、それが純なる作用となる。判斷はすべて自己自身の表現と考へることができる。判斷が判斷自身を主語とするといふことなくして、純なる作用の概念は成立し得ない。アリストートルは白から黑に變する時、その根柢に主體がなければならぬといふが、此主體が同時に判斷するものである時、それが純なる作用として視覺作用となる。是に於て質料が作用と考へられるのである。單に具體的一般者ともいふべき空間の如きものには、質料はない。變するものはアリストートルもいふ如く質料を有たねばならぬ。而も質料其者が判斷するものである時、働くものとなる。然らざれは單に變するものに過ぎない、變するものは直に働くものではない。質料が潛在的として現實的なる形相に先立つ間は、眞に純なる作用といふべきものはない、物が働くと考へられる。此場合物とは潛在的なるものを意味するのである。現實的なる形相が潛在的なる質料に先立つと考へる時、始めて純なる作用を見ることができる。而して此の如きものは我々の思惟とか意志とかいふ如きも

のでなければならぬ。嚴密に云へば、考へられるものが考へるものである我々の自覺卽ちアリストートルの theoria に至つて、眞に之を見ることができるのである。アリストートルの云ふ如く、家を建てるといふ働きは、家を建てた時、はじめて現實となる、併し見るといふ働きは、見つゝある時、既に現實である。アリストールの形相が質料に先立つといふのは、精神作用に於て之を見ることができる。知るといふことに於ては、判斷の主語となるものと判斷するものとが一となる、自分自身を主語とするのである。主語となつて述語となることなき本體の意義は、此に至つて極まる、認識主觀は特殊化の終極的原理とも云ひ得るであらう。

作られたものは、形相によつて質料を統一したものである。そこに形相と質料とを統一し構成するものとがなければならぬ。人爲的に作られたものに於ては、此三者は別々のものであるが、生物に於ては、形相其者が働くと考へることができる。併し質料は固、形相に對して單に受働的とは云へない、質料自身も一種の形相である。作られたもの、生ずるものは、形相と形相との結合といふことができる、質料とは潛在的なる形相に過ぎない。斯く考へられば、潛在的形相卽ち質料が一般的となり現實的形相卽ち働く形相か特殊的となる、物質の形相は生物の形相に對して一般的と考

へ得るのである。人爲的合成物に於ては、一般的と特殊との結合が偶然的であつて、外から與へられると考へられ、生物に於ては、その結合が必然的であつて、種差が內から與へられると考へられる。生物に於いて形相其者が働くといふことは、一般的なるものが自分自身にて特殊化することを意味するのである。一般的なるもの其者が特殊化の原理であることを意味するのである。是に於て質料と形相とが一つであつて、形相が形相を生むといふことができる。併し生物には尙外界といふものがある。此意味に於て尙純なる作用ではない、潛在的なるものが先立つといふことができる。唯精神作用に於てのみ、眞に質料を內に包み、形相が質料に先つといふことができる、質料其者が直に形相となるのである。白が黑に變する背後にあるものか、白と黑とを識別するものである。變じ行くすべての點が判斷の主語となると共に、識別するものである。一般的なるものが主語となる場合に於ても、一般者が到る所に自己自身について述語すると云ひ得るでもあらう。併し所謂具體的一般者例へば空間の如きものに於て、之を超越したもの、之に外的なるものが、內に含まれるとは云はれない、分離的なるものが連續的であるとは云はれない。部分が全體に等しいと云ひ得るかも知らぬが部分が全體を含むとは云はれない。總ての點が個體であ

るとは云はれぬ。嚴密なる意味に於ての精神作用といふのは、アリストートルの「思惟」に於ての樣に、自分の中から自分を造るといふことでなければならぬ。或は精神作用についても、潛在的なるものを考へ得ると云ふでもあらう。併し潛在的なるものが現實的なるものに先立つ限り、それは嚴密なる意味に於て精神作用ではない、對象化せられた合目的的作用に過ぎない。道德的性格といふ如きものは、働くことによつて創造せられるものである。潛在的なるものが現實的となつたと云へば、道德的性格の意義は失はれてしまふのである。藝術的內容の如きものについて同樣のことが云ひ得るであらう。我々の自覺に於て、自己が自己を知らない前に、自己はない、自己の働かない前に自己はない、自己の內容は自己の働くことによつて生ずるのである。我々は自己の內容を順次に知り行くと考へ得るであらう、自己の潛在的內容が順次にその全體を實現し行くと云ひ得るでもあらう。併し自覺の內容は如何なる對象界に發展するのであるか。自己は自己の中に自己を映すのである、自己の內容を映す鏡は亦自己自身でなければならぬ、物の上に自己の影を映すのではない。或は自覺の意識も時の範疇に於て發展すると考へられるであらう。併し時に於て自覺が成立するのではなく、自覺に於て時が成立するのである。普通に自覺と云へ

ば、單に知るものと知られるものとが一つと考へられるが、私は眞の自覺は自分が自分の中に於て自分を知るといふことであると思ふ。單に主と客と一と云へば、所謂反省以前の直覺といふ如きものとも考へ得るであらう、自覺の意識の成立するには「自分に於て」といふことが附加せられねばならぬ。知る我と、知られる我と、我が我を知る場所とが、一つであることが自覺である。自覺に於ては、結果が又働くものである、潜在的なるものは、現實的なものゝ投げた影である、一々の自己が創造的でなければならぬ。我々の自覺の本質は、我を超起したもの、我を包むものが我自身であるといふことでなければならぬ。此故に働く我に於ては、昨日も今日も一つである、その間に時の經過はない。

如何なる意味に於て、知るものが純なる作用の主體となるかと云へば、自分の中に自分を寫すことによるといふの外はない。自己の中に自己を寫すことによつて、自己は一切の作用を超越して、働くことなき主體となると共に、對象として純なる作用を見ることができるのである。働きが働きを生み、働く物なき無限の働きは、自己が自己を見るといふ不變不動の主體によつて成立するのである。純なる作用が自己自身の本體性を維持するには、自己の中に無限の發展を藏すると考へねばならぬ。

内に無限の發展を藏するといふことは、働く現在の中に無限の發展を藏するといふことでなければならぬ。若し單に過去と未來とに無限の延長を有すると考へれば、それは純なる作用ではない。現在の中に無限を藏するといふことは、現在の中に無限に進み行く行先が含まれて居り達すべからざる極限が含まれて居るといふことでなければならぬ。此點からして動くものの根柢に動かざるものがあるといふことができる、動いて而も動かざるものがあると云ふことができる。プロチヌスは運動と靜止との統一を「叡智的なるもの」の存在と云つて居るが、此の如き實在の相は唯、我々の自覺に於て見ることができる、尙一層積極的に我々の意志體驗に於て見ることができるであらう。動と靜との內面的統一者は自由でなければならぬ。現實の中に含れたる無限の行先が、主體として、全體を包むと考へられた時、我は自由の主體となり、動き行く何の點も我ならざるはない。判斷といふのは、此の如き主體への統一でなければならぬ、述語となることなき主體の自覺でなければならぬ。主體なき作用の自已自身を維持する主體は、自ら知るものでなければならぬ。作用は作用自身の內に省みることによつて、卽ち自己を知ることによつて、自己自身を維持するのである。知る者は働く者よりも大きく、働くものを內に包むものである。是故にプ

ロチンの如く萬物は一者を直觀するといふことができるのである。知る者は實在に對立するものではなく之を包むものである。普通には知るとか判斷するとかいふことを、否意志するといふことすら、働きといふ中に包攝するのであるが、ヘーゲルが「すべての物は判斷である」といつた如く、所謂働くとは、知ることの抽象的一面に過きないと考へることができるであらう。

アリストートルの云ふ如く物は全然無關係のものに變するのではなく、反對のものに變し行くのである。併し反對の性質は兩立し得ない、その背後に變し得るものがなければならぬ。此の如き統一は類概念とも考へ得るであらう。赤が青に變じた時、兩者共に色であるといふこともできる。併し此の如き主觀的統一は主語となつて述語となることなき本體ではない。此の如き主體は何處までも判斷を超越した個體でなければならぬ。而して此の如き主體が判斷其者の中にある時、判斷の主觀となる。卽ち何處までも主語となつて述語となるなき特殊化の原理が、判斷自身の中にある時、それは最早判斷の主語ではなくして、判斷する者となるのである。判斷とはかゝる本體の自己表現である。判斷に於ては、いつでも特殊なるものが主語となり、何處までも特殊として述語とならないものが本體と考へられるのであるが、

かゝる特殊化の原理を自己自身の中に含むものは、本體の本體とも云ふべきであらう。此の如き自覺的實在に於ては、すべての點が自覺的であり、すべての點が創造的であるといふことができる、すべての點が主體となるのである。純粹統覺としての「私が考へる」といふのも、單なる一般的意識ではなく、構成作用として、認識對象界の一々の點に於て判斷の主語となり、主觀となることができなければならぬ。自分自身の內に超越的なるものを有つといふことは、すべての點に於て自己を超越することでなければならぬ。之によつて、純粹統覺は思惟と感覺とを統一して客觀界を基礎附けることができるのである。

七

此論文はマイノングの內部知覺の分析に始まり、知るといふ事を明にするため、判斷の主語、形而上的本體、知的主觀との關係を考へて見た。而して此等のものゝ關係を見出すため、主語となつて述語となることなきものといふアリストートルの本體の定義を用ゐた。此考によつて我々は判斷と本體との關係を明にし得るのみならず、此の如き本體の考は純粹作用の考に到達せなければならぬ。而して純なる作用

が純なる作用として自己自身を維持する主體は、自ら知るものでなければならぬ。自同的判斷の形に於て、自己自身の述語となる直觀の主體は、自己自身を知り、自己自身を表現するものでなければならぬ。單に綜合統一の形式的主觀によつて認識の客觀性が與へられるのではない、自己自身の中に主語となつて述語とならない本體性を有するものにして、始めて眞の認識主觀となることができる。認識主觀は自己自身について述語する本體でなければならぬ。

本體を知るといへば、古い考へ方の樣に思はれるが、本體とは主語となつて述語とならないものと考へるならば、我々が物を知るといふのは、かゝる本體と合一することであり、眞理は知るものと知られるものとの合一にあると考へることもできる。單に思惟の當爲とか、主觀の構成とかによるのではなく、我々が判斷するもの、卽ち判斷の主語となるものとの合一、卽ち客觀的なるものゝ中に沒入することによつて、知識の客觀性の意義が明にせられ得ると思ふ。かゝる立場から見れば、空間の認識といふ如きものでも、本體の認識と考へることができる。單なる一般的概念と異なる直覺の形式としての空間は、空間的知識の主語となつて述語とならないといふ意味に於て、一つの本體と考へることができる。種々なる幾何學的知識とは、すべてかゝ

る本體と考へることである。色の判斷といふ樣なものに就いても、同樣のことが云ひ得るでもあらう、卽ちブレンターノの如く、すべての判斷は存在判斷 Existentialurteil とも云ひ得るのであらう。空間、時間、因果の法則によつて構成せられた所謂實在界といふものも、それが實在であると考へられるのは、やはり主語となつて述語とならないといふ意味がなければならぬ。唯、所謂實在界なるものが空間とか色の體系とかいふものとは異なつて、唯一つ實在界と考へられる所以は、それが如何なる意味に於ても主語となつて述語とならないといふことであらう。空間とか色とかいふものに於ては尙一般的なるものが本體となるからである。

すべて知るといふことは、自己の中に自己を映すといふことである、自己が自己自身を見るといふことである。それが知るといふことの最も完全な形である。映す我より云へば、構成すると云ひ得るであらう、映された我より云へば、主語となつて述語とならない超越的なるものに合一することである。併し構成するものと見るものが一であるといふことが、眞に知るといふことである。認識主觀が單に見る眼といふ樣なもので、何等自己自身を特殊化せないものならば、如何なる意味に於ても知識の客觀を樹立することはできぬ。又單に形式の特殊化を許して內容の特殊化を

含み得ないとするならば、認識主觀によつて事實的知識の客觀性を樹立することはできぬ。カントの所謂經驗界を構成する認識主觀は自然の自覺でなければならぬ、行爲的主觀が自己の中に自己を省みると云ひ得るであらう。我々の知覺に內とか外とかいふ區別のあるのではない。知るものは、すべてを自己の內に於て知るのである。物理的世界といへども我々は直接に之に面して居るのである。物理的世界の本體といふのも、感覺的性質の變化の主體として、知覺によつて直接に與へらるものでなければならぬ、行爲的主觀の直覺である。此故にフッサールなどの云ふ樣に、我々は物理的世界に就いても、明白なる知識を有つといふことができる、物理的本體は知覺の中に含まれて居るのである。之に反し、所謂內部知覺といへども、必すしも我が對象に直接して居るのではない。對象との一致は、マイノングの云ふ如く達することのできない極限點に過きない。若し物理的對象が空間的に外にあると云へば、內部知覺の對象はいつでも時間的に外にあると云ふことができる。眞に對象其者に合一した內部知覺といへば、所謂省みられた自己をも離れた立場でなければならぬ。此の立場に於ては、すべての知識の立場が統一せられて居る。事實眞理も永久眞理も、究極は皆此立場によつて成立するのである。數學的眞理の如きものが、自己

の內的證明によつて立せられると考へられるが、かゝる場合、之を證するものは所謂內省的自己ではない、却つてかゝる自己を超越することによつて證せられるのである。所謂內部知覺といへども、亦此立場によつて內的明白を得るのである。唯、所謂內部知覺なるものは、自己の中に自己を見るといふ自由我の射影なるが故に、知覺と異なつた位置に立ち、すべての知識が作用の內容として、此に結合せられ、此に於て證せられると考へられるのである。主語となつて述語となることなき主體が作用其者となつた時、作用の內容となる、マイノング所謂「內に向けられた對象」となる。純なる作用となればなる程、內容卽作用となる、氏の云ふ如く對象が對象たる性質を失ふことなくして內容の位置に來ると云ひ得るであらう。赤の知覺作用は赤ではないと云ふが、嚴密には此花が赤いとも云はれない、唯此花の色が赤いのである。要するに、赤は赤であると云ふの外はない、色は色自身について述語するのである。對象を指示するといふことも、作用が對象を外に見るのではなく、自己自身の內に見るのである。對象とは、自己自身の內に映されたる作用の影に過ぎない。對象を作用の外に見ると考へるのは、心理的作用を考へるが故である。純なる作用の立場に於ては、內容其者が對象として直に客觀的であるのである。藝術的創造作用に於て、作用

の外に見られた概念的對象は、却つて主觀的と考へられねばならぬ。指示的關係といふのは一種の表現作用であつて、此立場に於ては意味が創造的となるのである、判斷の主語なるものが判斷するものとなるのである。

すべての立場を除去した純粹現象學的立場といふものも、更に之を徹底して行けば、作用が作用自身を見るといふ立場に進み行かねばならぬと思ふ。斯く考へることによつて、種々なる世界の本體を內に見ることができ、客觀的知識を基礎附けることができる。然らざれば、記述的心理學の立場を脫することはできない。現象學的立場は所謂心理學的立場を離れたものであるは云ふまでもない。併しそれは時間の範疇に當嵌つた事實我の立場を離れたまでであつて、尙內部知覺の立場を脫したのではない。單に見る眼といふ如き知的我は、尙對象化せられたものである、對象界の一つである。無論、內部知覺の世界は他の對象界と異なつた特殊の地位に立つものであらう、併し眞にすべての立場を除去した純我の世界ではない、尙他の對象界と外的關係に立つものである。（完）